


特定非営利活動法人 日本免疫学会
2023 年度 後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	荒井 真也	会員番号	0035231	
申請者の所属・職名	大阪大学免疫学フロンティア研究センター・特任研究員			
出席会議名	Keystone Symposia: Mechanisms of Microbiota-Immune Interactions - Towards the Next Decade			
発表論文タイトル	Antigen-specific Stimulation Induced and Augmented Peripherally Derived Treg Cells which Establish Treg-specific Epigenome and Orchestrate Oral Tolerance			

実施結果:

10月8日から12日にかけてアメリカはユタ州ソルトレイクシティで開催されたKeystone Symposia: Mechanisms of Microbiota-Immune Interactions - Towards the Next Decade に参加した。本カンファレンスはKeystone Symposia: Circulating Metabolic Intermediates as Fuels and Signals との共催であり、joint session も行われたため一挙両得の学会であった。開催地の Snowbird はスキーリゾートとして有名で、時差ボケのみならず標高の高さも相まって初日は疲労感を感じる時間があった。スピーカーのラインナップは注目に値し、T 細胞や腸管免疫の大御所を始め、新進気鋭の腸内細菌界限の研究者が一同に会したと表現するに相応しかった。当該分野は、ここ10年で免疫系に作用する菌種の同定から短鎖脂肪酸や胆汁酸による影響の発見へと展開され、近年では腸内細菌そのものを遺伝子改変し宿主の恒常性を維持する試みがなされている。そんな中、食餌性抗原に対する制御性 T 細胞(Treg)の分化に関する演題で突撃したところポスターのみならず、あろう事か初日の口頭発表にも採択いただき、誠に恐悦至極の思いであった。口頭発表に関しては恙無く終えたが、Treg を引っ提げて乗り込み過ぎた感は否めず、日本の某 T 細胞の学会ほど活発な議論とはならなかったところは少し寂しさがあった。発表後は数人にロビーで声をかけてもらい、夜のポスター発表会場での議論はそれなりに充実したものとなった。腸管という交絡因子が多く複雑な組織を研究対象にする研究者が集まるからこそ、多様な発表を採択するという主催者の open-minded な意図が少し見えた気がした。各セッションの合間には世界各国から集まった研究者とコーヒーを飲みながら、出身地、研究テーマ、今後のキャリアパスまで幅広くコミュニケーションを取ることができた。昨今の憂慮すべき中東情勢のため、イスラエルの研究者のキャンセルやリモートでの参加が残念ではあったものの、サイエンスに国境がないことや特に米国においてサイエンスが圧倒的なスピード感で進んでいることを肌で感じることもできた。異分野の新たな研究の切り口を学ぶだけでなく、自分の研究の位置づけやストーリーテリングの方法を見つめ直す非常に良い機会になった。

シンポジウム終了後、深夜便に乗ってニューヨークへ移動し、Weill Cornell Medicine の Artis lab に所属する矢野さんの元を訪れ研究室を見学させていただいた。矢野さんには Iliev lab の日下部さん、Longman lab の永山さんを紹介していただき、炎症性腸疾患の研究に取り組む日本人研究者コミュニティが築かれていることを知った。米国滞任歴の長い矢野さんには米国の PhD 研究者がどのように教育されキャリアパスを歩むのかを教えていただき、日本の大学院教育、学位取得とその後のキャリア選択における大きな違いを感じた。Rockefeller, MSKCC, WCM は教育研究活動において非常に緊密に連携しており、単なるコラボレーションだけでなく様々な研究活動において障壁なく、日本では目にすることのできないスピード感で研究が展開されていることも教えていただいた。ニューヨークは経済活動において世界をリードする都市ではあるが、学術研究においてもトップランナーが多く在籍しており、Sinatra が歌ったように「ここで成功すればどこでもやっつけられる-全ては自分次第」…そんな夢のあるアカデミアがマンハッタンの一角に広がっていた。

本 Travel Award の受賞にあたり、岸本忠三先生をはじめ日本免疫学会の選考委員の先生方、推薦いただきました坂口志文先生に心より御礼申し上げます。また私自身がそうであったように、この報告書を読んだ若手研究者の皆様が刺激溢れる国際学会での発表を積極的に検討する一助となれば幸いです。